
思い出

ルヒア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出

【Nコード】
N5053Y

【作者名】
ルヒア

【あらすじ】
振られて立ち直ってゆく男の姿を描こうとして、なぜかこうなった。

（前書き）

分かりづらかったらごめんなさい。

地面を舐める猛吹雪。白にぼやける仄かな灯り。

オフィスの窓越しに、暮れていく街をじっと眺めている。

そんな君を、僕は傍らで見つめている。

僕の手には、ちっぽけなガラスの珠が握られている。手の平にすっぽりと包めるほどに小さくて、落としてもすれば簡単に砕け散ってしまいそうな、繊細な球体のガラス。その中心から、紅くもあり蒼くもある、神秘的な煌めきが渦を巻いて目に届く。

力を込めて唇を噛んだ。無いはずの動悸が、確かに聞こえてくる。もう少し。

今日の空が明るくなるまで、日々僕の掌が弄んでいたのは、ただの石ころだった。けれども今は、微かな輝きを見せるほどには、美しさを取り戻しつつある。

もちろん、一度輝きを失った者は、完全に元通りになどならない。このガラスの珠も同じだ。くすんでしまう以前の、人を眩ませるような光を放つ事はもうないのだろう。

君が再びディスプレイに向かってしまつて、僕は一人、窓辺に残された。

しゃんとした背広から目を逸らして、僕は転がしていたガラスの珠を持ち上げた。親指と人差し指に摘まれて、目の前にかざされた君の欠片を覗き込む。

屈折した街の景色の手前に、映し出された男女の姿があった。僕がよく知るレストランで、向かい合つてランチを食べている。と思えば、たちまち彼らは輝く渦の中心に飲み込まれて、代わりに霧が晴れるのように現れたのは、手を繋いで道端を進む二人の理由のない笑顔。何が、そんなに楽しかったのだろう。しばらくそんな変遷が幾度となく繰り返されて、僕はやがてすつと手を下ろした。す

すっかり黒く閉ざされた天球の下、窓ガラスは鏡と化して、僕が映るべきはずの所に、黙々と書類を整理する君が左右反対に写っていた。もうすぐで、これを君の元に返すことが出来る。

本来ならば、これは君の内奥にあるべき欠片であって、僕が持つべきものではないのだ。

数日前の晩、彼女の口から放たれた一言が、僕を戻りようにないほどに過去の人にしてしまつてから、懇願するように藻掻き苦しむ君の隣にずっといた。現在きみから引き剥がされて浮遊する僕の、この実体のない手の中の石ころへ、狂つたように手を伸ばす君を、ずっと見ていた。僕と君の間には、越えようにならない漆黒の壁が、時空を裂いて聳えていて、僕にはどうしようもなかった。

今は違う。君は変わった。壁は既に取り払われて、あとはこのガラス珠が、それに相応しい煌めきを放つまで待つだけだ。寂しい気持ちもあるけれども、このガラス珠は僕にとつても宝物で、それが何らかの形で君の中で生きていくのは、本望だ。

僕はもう、君に戻れないから。

社員が一人、一人と家に帰っていく。蛍光灯の下で、相変わらず仕事に没頭する君がいた。僕の手握られた珠は、今や宝石のようで、それは以前の光とは似ても似つかないけれども、美しい事には変わりがない。また同時に、僕の芯が熱く振動し出した。背骨がとろけ出すような感覚が、約束の時間を告げた。左腕から、光に分解されていく。君が僕にもたれかかる感情を捨てて、僕を成している現実が、全て消えてしまうのだろう。その前に……

君は徐に荷物をまとめ始めた。エレベーターへ向かつて一步を踏み出した。

静かな輝きの溢れ出す紛う事のない宝石を、僕はそっと、歩き出した君の背中に押し込んだ。

帰宅の道中、彼は歩き続けた。

吹き荒む風に、雪は交じってはいない。ただ、鋭利な冷たさだけが男の頬を打つ。

まばらな人影同様に、ただ外套のポケットに手をつ突っ込んで、震えていた。

ふと目を向けると、若い恋人達が手を繋いで、互いに笑いかけていた。寄り添いあつて、温かそうで。

彼は立ち止まる事はなかった。

吐く息が白く、彼の後ろに、細々と棚引いている。

彼は駅のホームに立っていた。身を切る寒風に衣服がはためき、向こうのホームを貨物列車が通り過ぎた。寒さを身に染みこませ、彼はほうつと息を吐いた。

光の粉塵となって、彼の瞳を煌めかせた。

その煌めきも、忘れる事はないのだろう。

（後書き）

「僕」は、幸せだった頃、男の過去の人格です。「宝石」は幸福の記憶を表しています。

最初、男はどうしようもなく現実を受け入れられず、過去の記憶と自分にすがりつきます。悲痛な想いが思い出をつらいものにかえま
す。だから石ころ。

でも、時間が経つにつれて気持ちの整理がついてくる。

最後の「光の粉塵」ないのだろう」

吐く息の煌めきは「僕」が消えていく様を表しています。白い息は消えるから。

忘れないだろうっていうのは、男は思い出として、だけではなく、過去の自分、すなわち「経験」も忘れずに、全てを受け入れて「未来の糧」にして歩いていくさまを演出したかった。

時たま、良き日々の思い出がづらい記憶になり果てたとき、それを忘れようとする人がいるような気がして、それを批判して書いた、のかなあ……。

余り考えないで書いているんで、自分でもよく分かってないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5053y/>

思い出

2011年11月17日20時03分発行